
散々な夜

O.L.

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

散々な夜

【Nコード】

N9945Y

【作者名】

O.L.

【あらすじ】

本来なら定時で仕事が終わる瞬間、解放感でいっぱいになるのに、今日は家に帰るのが憂鬱で仕方なかった。嫁とのケンカが原因である。

帰りたくない。帰りたくない。帰りたくない。

って、ダメだ。思い始めるとキリがない。

頭を振ると、ゆっくりデスクを片付けた。定時を向かえ、同僚たちが次々と帰っていく姿が羨ましい。仕事が終わって解放感たっぷりなんだろうなあ。

「疲れた顔だな」

振り向くと、同期の小島が立っていた。

「おう、まあな」

「早く帰って、疲れ溜めないようにしろよ」

呑気そうに言いながら背を向けた小島を、慌てて呼び止めた。

「飲みに行こうぜ。おごるから」

「小遣い厳しいって言ってなかったっけ？」

「今はそんなのどうでもいいんだ」

これで少しは時間稼ぎができるなんて思いつつ、俺たちは近くの居酒屋で酒盛りを始めた。ここまで帰りたくない理由は、俺の嫁にある。

最近よく分からないアイドルに夢中になってる嫁は、俺を見るたび溜め息をつき、「何でこんな人と結婚なんか」と呟いていた。

「自分がイケメンに釣り合う女とでも思ってたの！？
このアイドルオタクが！」

それが逆鱗に触れてしまったらしい。嫁は俺に向かって手当たり次第、物を投げつけてきた。

うちはマンションだから近くの部屋の人に迷惑がかかるし、怒り狂う嫁を止めなければと抑え込んだ。

すると俺の腕に噛みついたり引っ掻いたり、髪を引っ張ったり…
…もう思い出したくもない。

「頼む、今晚だけ泊めてくれ！ 全部おごるんだし、な？」

「今、カミさんの妹夫婦が泊りに来てて部屋がないんだよ」

なんてタイミングの悪い。

今ばかりは恨ませてくれ、小島の奥さんの妹夫婦。

「まあずっと喧嘩してるわけにいかないんだし、何か好きなものでも買ってって機嫌を取ったら？」

「アイツの好きなものはイケメンアイドルだから。それは無理だな」

小島は「そりゃそうだな」と、引きつった笑いを浮かべていた。

「おい！ 起きろって！」
激しく肩を揺すられ、目が回るような感覚がした。

「大丈夫か？」

目の前に、コップの水が置かれている。

「水、もらっといたから。ったく、いくらなんでも飲みすぎだつての」

ぼんやりだけど覚えてる。家に帰ることを考えたらストレスで歯止めが効かなくなつて、相当量を飲んだんだと思う。慌てて財布の中身を確認した。

「あ……あのさ……」

「どうせ金が足りないんだろ？」

頷くと、小島は「仕方ねえなあ」と言いつつ一万円を渡してくれた。

「さっきタクシー呼んだからな。そんなんじゃ電車に乗れないだろ」

「申し訳ない……」

「言つとくけど、貸しだからな」

フラフラの身体を小島に支えられ、タクシーに押し込められた。なんていい奴なんだ。愚痴を散々聞いてくれて、金まで貸してくれて。

窓から夜景を眺める。今からあの家に帰るなんて……。嫁の怒った顔を思い出した瞬間、本格的に気持ち悪くなってきた。

「す、すみません……。ちょっとトイレに……」
仕方なく、近くの公園に寄ってもらった。フラフラしながらも何とかトイレに入る。

うう……。もう最悪だ……。
みっともねえ……。

少しだけ気持ち悪いのがおさまると、またフラフラしながらタクシーに戻った。再び走り出し、マンション前に到着する。

「あれ、足りない」
ポケットに入っている小銭を足しても、たった数百円分足りなかった。さつき公園に寄らなければ足りたのに……。

「カード払いもできますよ」
「カードは嫁に没収されて……」
「じゃあお金、取ってきてもらえますか？」
運転手さんに言われ、仕方なくタクシーから降りた。

マンション五階の部屋を見上げると、電気が消えていた。もう寝ているんだろう。そっと部屋に入って、金を取ってこればいい。

俺はエレベーターに乗り、五階のボタンを押した。部屋の前に着き、ポケットを探る。

「……って、カギがない！」

マジかよ。

何でこんな不連続きなんだ。

俺が一体、何をしたらって言うんだよ。

「おーい……」

小さい声で呼んでみたけど返事はない。インターホンは壊れてて使えないし……。

「開けてくれよ……」

あーあ。部屋にも入れず、タクシーの金も払えず、どうなっちゃうんだろ。俺はドアにもたれて座りこんだ。

+++++

「……おい、起きろ！」

ん？ もしかして、今までののは夢だったのか……？

「立て！ 来い！」

何だコイツ、うるさいな……。よく見ると、俺の腕を掴んでるのは警察官だった。

「何だ!？」

「話は署で聞かせてもらおう」

「いや、何かの間違いだ。部屋に嫁がいますから、話を」

振り返ると、女性が怯えた目をして俺を見ていた。確か同じマンションに住んでる人だった気が……。

「タクシー運転手とこの女性から、同時刻に通報があったんだよ。タクシー運転手からは『金を取りに行った客が戻ってこない』、彼女からは『変な男性がドアの前で開けてくれと言いながら、座りこんでいる』とな」

ふと見ると、ドアに「401号室」と書いてあった。エレベーターに乗った時、五階じゃなく四階を押していたんだ。酔ってたせいで間違えたのか……。

「とにかく来るんだ!」

フラフラしている俺を、警察官は無理に引っ張って歩かせた。

「俺は怪しい者じゃ」

「いいから来い!」

悪夢のような酷い夜は、これからまだ続くようだ。

3

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9945y/>

散々な夜

2011年11月30日00時50分発行